



と www.tenpla.net

プラネタリウム

vol.
214

高梨直紘 (東京大学) / ☆ 平松正顕 (国立天文台)

書店で科学書の棚を探してみると、そこには宇宙の本が何冊も並んでいます。星座や星空を解説した本、宇宙の始まりや重力、素粒子まで含む物理学ゴリゴリの本、様々な切り口で宇宙の色々な姿を見せてくれる本……。宇宙に関する本って、毎年何冊くらい出ているのでしょうか。そして、宇宙に関する本を買って読む方ってどれくらいいらっしゃるのでしょうか。宇宙関連書籍の需給バランスは私(平松)にはわかりませんが、そんな中に、新刊を一冊送り込むことになりました。「宇宙はどのような姿をしているのか」(ベレ出版)です。

とても大きなテーマのタイトルになっていますが、タイトル通り、この本では宇宙のさまざまな「姿」をご紹介します。メインのストーリーは、地球からどんどん遠ざかりながら、距離に応じて「車窓」に現れてくる宇宙の姿をご紹介しますというものです。地球の「きょうだい」たる太陽系の惑星や小天体たち、夜空の中で繰り広げられる星の生と死のドラマ、それらを包含する巨大な天の川銀河、さらに大きく広がる銀河に満ちる宇宙、そして加速膨張を続ける宇宙全体の姿。ここに書くだけでも盛りだくさんな内容ですが、本そのものも370ページとなかなかの厚さになりました。

最初にこのテーマでの執筆を打診いただいたのは、2013年のことでした。なんと8年以上前です。当時も今も、私は朝日カルチャーセンター横浜教室で天文学講座の監修をしています。いろいろな専門家の先生をお呼びすることが多いのですが、時には私が全6回で宇宙のあらゆる話題についてご紹介する講座を設定することもあります。今回の本のテーマは、このカルチャーセンターでの講演がもとになっています。

講演の口述筆記のような形で作られた書籍はいくつもありますが、いざ形にしようとするとなかなか大変でした。対面の講演では、聞いてくださっている皆さんの表情をうかがいながら、理解度を測りながら話を進めていくのが普通です。ところが書籍ではそれができません。書ききったものを読者の皆さんにお預けするのみ。結果的に、講演をもとにしてはいますがほぼ完全に書き下ろしとなりました。文章を書きながら「この書き方で本当に納得してもらえるのだろうか」という恐怖が頭をもたげ、キーボードを打つ手が止まります。そうこうしているうちに、8年もたってしまったわけです。はい、言い訳です。

8年もかかってしまったケガの功名と言われると怒られるかもしれませんが、この間は天文学にとってはひとつの黄金期だったかもしれません。2014年にアルマ望遠鏡が若い星のまわりの原始惑星系円盤を克明に描き出し、2015年に連星ブラックホール合体からの重力波が検出され、2017年に連星中性子星の合体からの重力波と光

本を書きました。370ページあります。何文字あるかは数えていません。8年かかりました。たぶん1/3くらいはiPhoneで書いたと思います。思いはたくさん詰めました。



刷り上がった本。370ページの本は自立します。

が捉えられ、2019年にはM87中心の超巨大ブラックホールの影が捉えられました。この8年間で、何個もノーベル賞が出ていくくらいの発見が続いています。さらに、発見された太陽系外惑星の数はこの間に3倍以上に増えました。結果的には、より豊かになった宇宙の姿をお届けできるのではないかと考えています。また、宇宙の姿そのものだけでなく、それを読み解こうとしてきた天文学者の姿も盛り込むことにしました。多くの人が悩み、間違い、論争し、競争し、協力してきたその先に、いま私たちが享受できる宇宙の姿が構築されているからです。その営みも、宇宙そのものと同じくらい興味深いものです。

私は子どものころから宇宙に興味を持っていましたが、その入り口はやはり本でした。はっきり覚えている最初の宇宙の本は、野尻抱影の「星と伝説」。青い表紙にかわいらしいクマの絵があることが印象的な、星座にまつわる神話を紹介する本でした。学研まんが「ひみつシリーズ」を読み漁り、いろいろな図鑑を覚えてしまうほど眺め、スカイウォッチャーやNewtonで最新の情報に触れて今の私があります。こうした名著に並べるのはおこがましいですが、そこは枯れ木も山の賑わい。大きな銀河も小さな銀河も、明るい星も暗い星もいろいろあっていいのがこの宇宙です。生まれたばかりの小さな存在を、どうぞよろしく願います。